4章

【問題】（演習）

出典…宮澤康人『学校を糾弾するまえに』／東京大学　06年

文章略解

中世では子どもは大人の仕事の後継者として仕事を見習いながら一人前になった。ゆえに中世の教師は自己の職業を実施する過程自体で生徒の模範となることができ、知識人志向を共有する生徒との間に先達と後輩として学習の共同体が成立していた。しかし、近代には学校の大衆化によって生徒の志向が多様化したので、教師と生徒は理想的人間像を共有しにくくなり、これに対処するために方法自覚的な教育の諸技術が教師に求められるようになる。

解答

㈠　子どもが大人の職業の後継者である社会では、大人は仕事の経験と能力が優（まさ）る点で子どもにとって敬意の対象となるから。

㈡　近代の教師が積極的に生徒を指導するのに対して、中世では志向を共有する生徒が教師を模範とすることで教育が機能したということ。

㈢　近代の学校では生徒の大部分と教師とで志向が異なるために、教師と生徒が理想的人間像を共感する学習共同体が成立しにくいこと。

㈣　近代の教師は、生徒を教育指導するにあたって、生徒の人格や志向を生徒個別に把握する努力を続ける必要があるということ。

【問題】（演習）

出典…『畸人十篇』／東京大学　03年

書き下し文

敝郷の東に、大都邑有り、名は亜徳那と曰ふ。其の昔時に在りて、学を興し教を勧め、人文甚だ盛んなり。責煖氏は、当時大学の領袖なり。其の人徳有り文有り。偶四方の使者、事に因りて廷に来る。国王使者の賢なるを知り、甚だ之を敬ひ、則ち大いに之を饗す。是の日に談ずる所、高論に非ざる莫し。雲のごとく雨のごとく、各才智を逞しうす。独り責煖のみ終席言はず。将に徹らんとして、使之に問ひて曰く、「吾が儕帰りて寡君に復命す、子を謂ふこと如何」と。曰く、「他無し、惟亜徳那に老者有りて、大饗時に於て能く言ふこと無しと曰へ」と。祇此の一語、三奇を蘊む。老者は四体衰劣にして、独り舌（のみ）弥強毅なり、当に言を好むべし。酒の言に於ける（は）、薪の火に於けるがごとし。即ひ訥者といへども是に於て中変して譁し。亜徳那は、彼の時賢者の出づる所、佞者の出づる所なれば、則ち言を售る大市なり。三の一有るも、言を禁じ難し、矧んや三之を兼ぬるをや。故に史氏は諸偉人の高論を誌さずして、特に責煖氏の言はざるを誌す。

現代語訳

私の郷里の東方に、（ある国の）大きな首都があって、（その都の）名は亜徳那という。その（町は）かつてにおいては、学問教育を振興して、文化がきわめて盛んであった。（その国には）責煖氏（なる人物がいて、その人）は、そのころ国立学校の総長であった。彼の人がらは、篤い人徳と豊かな学殖教養とを兼備していた。

あるとき諸国の使者が、事情があって（亜徳那の）朝廷に参集した。（文化国家の首長を自任する）国王は使者たちが賢人ぞろいであることに気付いて、彼ら〔＝使者たち〕に十分に敬意を表したうえで、盛大な宴会を主催して彼らを歓待した。その日に（宴席で）交わされた談話は、高尚で優れた議論でないものはなかった。（その談論風発の様子はまるで）雲のように（宴席上に高く涌きおこるかと思うと）、雨のように（宴席に連なるすべての人々の考えの上に降りかかり）、それぞれ（の使者たち）が（自分の）才学や智慧の持てるかぎりを披露しあった。（ところが）ただ責煖氏だけは、饗宴の間ずっと口をきかなかった。いよいよ饗宴も終わろうかという

ときになって、（ある）使者がその人（責煖）に（、寡黙な責煖を見くびって）尋ねて、「わたくしどもは帰国ののち、わが主君に（このたびの外交任務の首尾について）報告いたしますが、（今日の饗宴のことを主君に説明するときに）あなたさまの御様子を（わが主君に）お伝えするのは、いかがなものですかな〔＝ずっと議論に加われなかったあなたのことにも触れておいたほうがよろしいかな〕」と言った。（すると責煖は）「どうということもない、亜徳那（の町）には年寄りがおって、（国王の御前での）大宴会のときにも、口を利かずにいることができたと、それだけおっしゃいませ」と答えた。

（当日のさまざまな議論のうち、）この（責煖氏の）わずかひとことの中に、三つの奇特な美点が含まれている。（まず、一般に）老人と言うものは、からだ全体が衰えているから、（かえって）ただ舌鋒だけはますます鋭くなりがちなものであって、（そのせいで）当然のこととしてしゃべるのが得意になるときまっている。（ところが責煖氏は高齢にもかかわらず沈黙を守った。）（次に、宴席などでの）談話のときの酒（のはたらき）は、（ちょうど）火を焚くときの薪のようなもの（で、酔うほどに酒の勢いで口はますます達者になるもの）だ。たとえ（普段は）口下手なひとであっても、そんな（宴席での談話の）ときには、（酒を飲んでいるうちに）途中で（人が）変わっ（たようになっ）て、うるさく騒ぎ立てるものだ。（ところが責煖氏は宴席にもかかわらず沈黙を守った。）（最後に、）亜徳那（の都）は、当時は賢人学者を輩出し、（いっぽうまた、人格はともかく）口先だけでも達者な人物を輩出していたところでもあったから、ということは（亜徳那全体が）言論を売り物にする大きな市場（のようなもの）だった。（ところが責煖氏はその亜徳那の大学すなわち言論の府の長であるにもかかわらず沈黙を守った。）これら三つ（の饒舌になる条件）のうち一つありさえするだけで、ものを言うのを押しとどめることは難しいというのに、まして三つとも兼ね備えると、無言を通すのが難しいのはなおさらだ。（ところが責煖氏はこの三つの条件をすべて揃えているのに沈黙を守ったのである。）したがって歴史家は（あの宴席での）賢人使者たちの議論（の内容）は記録せずにおいて、特筆すべきものとして責煖氏が口を利かなかったことを記録したのである。

解答

(一) 饗宴当日の談話はすべて高尚な議論だった。きわめて盛んに各自が才学や智慧を発揮した。ただ責煖だけは饗宴のあいだ無言だった

(二) どうということもない、亜徳那には老人がいて、その老人は大宴会のときにも沈黙を守ることができたとだけいいなさい

(三)
(ア)＝この責煖のわずかひとことの中に、三つもの美点が含まれている
(イ)＝高齢でも饒舌にならないこと。酒に酔っても騒がないこと。議論が盛んな土地柄の中でも弁舌を控えること。

(四)
三条件の一つでもあれば黙っていられないのに、まして三つ揃うとなおさら沈黙は困難だ

【問題】（自習）

出典…岡部隆志『言葉の重力』／東京大学　01年

文章略解

携帯電話での若者同士の会話やインターネットでの発言から感じるのは、相手に何かを伝えようというメッセージ性の欠如である。言い換えれば、自らの内面の固有の何かを抽象化し普遍化して他者に表出し、同時に周囲と自己とを隔絶する「文体」の欠如である。そこで表出される各自の「孤独」は、「文体」という方法を介さない分生々しく現実的であり、しかも社会的である。

解答

(一) 携帯電話による若者同士の会話には、特に伝えるべき強調点がなく、相手の反応を確かめる心意も見られないから。

(二) 現在の多義的で流動的な世界に対して、文体は自己の固定した内面の表出であるほかないから。

(三) 文体は他者に対して自己の固有の内面世界や思想を表出するもので、自己の独自性を示すものだから。

(四) 自己の内面を普遍化して表明する文体という手段を介さないため、より即物的な孤独の表出となっているということ。

解説

本文は内容的に「独り言」と「文体」の二項対立的図式で書かれているため、それぞれについての筆者のコメントを整理してゆけば、それほど難しくはないだろう。

(一) 設問で要求されているのが「筆者の判断」の「理由」であるということを前提に、「独り言」についての筆者のコメントを整理し

てゆく。傍線部直後のあたりに「（語り口のニュアンスが）変だというのは、会話の中に特に伝えたいことを強調するポイントがない」とあることはすぐ気づくだろうが、本文の展開上第七段落までで内容的にひとまとまりになっている点に注意。「携帯電話での若者同士の会話」と「インターネット上の発言」がともに「独り言」という点で同類項として扱われている。六段落目の冒頭に「独り言には、～言葉でもない」とあり、この部分の「何かを伝えようというメッセージ性はない」が傍線部直後にあった「伝えたいことを強調するポイントがない」と対応していると判断できる。したがって答案の作成では「特に伝えたいことを強調するポイントがない（何かを伝えようというメッセージ性はない）」と、「相手の反応を確かめながらの言葉でもない」との二点をおさえた記述が必要である。

㈡　傍線部の直前に「言い換えれば」とある点から考えれば容易。直前の一文「だが、それは～ものでもある」で、「それは私が私の固定した私の世界を他者に無理強いするもの」「多義的で流動的なこの現在の世界から私を閉じてしまっているもの」とあり、ここの「それ」はその前の部分で「私が他者にかかわる態度」「私自身の伝わりにくい世界を他者に伝える方法」「私の思想」とされている「（私の）文体」である。また、その直前には「こういう（携帯電話での若者同士の会話やインターネットでの発言のような）独り言のやりとりに参加できないことに、何か不自由である自分を感じ取る」とある。以上の点から、傍線部でいう「私の文体」が「私を不自由なものへと縛り付けている」理由を考える。

「私の文体」＝「他者にかかわる態度」「私自身の伝わりにくい世界を他者に伝える方法」「私の思想」であり、同時に「私の固定した私の世界を他者に無理強いするもの」である。これが「私を不自由なものへと縛り付けている（独り言のやりとりに参加できないことに不自由を感じる）」理由としては、「現在の世界が多義的で流動的」であるということと、「文体」が「自身の固定した内面」を表すものであるということの齟齬である、と判断するのが妥当だろう。

㈢　傍線部を冷静に解析すれば、「私」＝「（私の）文体」というロジックになっていることがわかるだろう。「（私の）文体」については、設問㈡の解説でも示したように、「私が他者にかかわる態度」「私自身の伝わりにくい世界を他者に伝える方法」「私の思想」「私の固定した私の世界を他者に無理強いするもの」などとされていた。これらのなかで、「文体」と「私」自身とのイコールの関係を示すのは「私自身の伝わりにくい世界」「私の思想」「固定した私の世界」などの記述である。したがって、「文体」とは「自己の固

有性」「独自性」を示すもの、ととらえられていることになる。だから「文体不要」はイコール「私（自己）不要」となる。なお、答案の書き方として、「文体は自己の独自性を表すものであり、文体の放棄は自己の放棄を意味するから」などというのも考えられるが、後半の「文体の放棄は」云々を書く必要はない。なぜなら「文体の放棄」＝「自己の放棄」というのは傍線部自体の「言い換え」であり、「理由」ではない。「理由」そのものである「自己の独自性を示すものだから」を丁寧に書けばよい。

㈣　傍線部では「文体」を「抽象力」としているが、「文体」はすでに設問㈡㈢の解説で見たように、「自己の内面」「固有性」「独自性」と直結するものであり、その「伝えがたいもの」を「他者に伝える方法」である。また、傍線部を含む段落の冒頭で「伝えがたいもの」を「孤独」と規定している。つまり、「固有（独自）」の「自己の内面（孤独）」を「他者に伝える」のがここでいう「抽象力」という言葉の意味と考えることができる。「個」に属するものを「他者に伝える」わけだから、「抽象力」とは「普遍化する力」と言い換えることができるだろう。したがって、傍線部の「生々しく現実的」という部分は、「普遍化されていない状態」、「即物的」「具体的」な状態で語られる「孤独」である。

以上をおさえた上で、答案をまとめればよい。

【問題】（自習）

出典…龔自珍『病梅館記』／東京大学　02年

書き下し文

或ひと曰く、「梅は曲を以て美と為し、直なれば則ち姿無し。欹くを以て美と為し、正なれば則ち景無し」と。此れ文人画士、心に其の意を知るも、未だ明詔大号して以て天下の梅を縄すべからざるなり。又以て天下の民をして直を斫り正を鋤き、梅を殀し梅を病ましむるを以て業と為して、以て銭を求めしむべからざるなり。文人画士の孤癖の隠を以て、明らかに梅を鬻ぐ者に告ぐるもの有りて、其の正を斫り、其の直を鋤き、其の生気を遏めて、以て重価を求めしむ。而して天下の梅皆病む。文人画士の禍の烈なること此に至れるかな。予三百盆を購ふに、皆病める者にして、一の完き者無し。既に之を泣くこと三日、乃ち之を療せんことを誓ふ。其の盆を毀ち、悉く地に埋め、其の縛を解き、五年を以て期と為し、必ず之を復し之を全くせんとす。予本より文人画士に非ざれば、甘んじて詬厲を受け、病梅の館を闢きて以て之を貯ふ。嗚呼。安んぞ予をして暇日多く、又閑田多からしめ、以て広く天下の病梅を貯へ、予が生の光陰を窮めて以て梅を療するを得んや。

現代語訳

ある人が言うには、「梅は曲がっているのを美とし（て珍重し）、真っ直ぐであったら（かえって）趣がない。傾いているのを美とし（て珍重し）、真上に伸びていたら（かえって）趣に欠ける」と。このこと（について）は、（以前）文人や画家は、心（の中）でその意味を知っていても〔＝心の中ではそのように思っていても〕、（その頃は）まだおおっぴらに（そういう価値観を）唱えてそれに〔＝その美的価値基準に〕よって天下の（すべての）梅を縄で縛（って変形させ）ることはしなかったのである。それに天下の人々に、（せっかく）真っ直ぐな木を切り本来の姿に手を加え、梅を早死にさせ梅を病気にさせることを仕事とし、それによって金儲けをさせようとはしなかったのである。（ところが）文人や画家の、彼らだけの趣味で（あまり一般に）知られていなかったのを、はっきりと梅を売る人に告げることがあって〔＝文人や画家の間の趣味的嗜好が一般に知れ渡って〕、（梅を売る人に）梅の本来の姿を損ね、梅の真っ直ぐに伸びたのに手を加え、梅の生気を失わせて（文人や画家が好みそうな梅を作り）、それで高額な値段を要求するようにさせた〔＝

高価に売るように仕向けた〕のである。その結果天下の梅はすべて病気になった〔＝本来の姿ではない、不自然な形になった〕。文人や画家の（趣味がもたらす）弊害の甚だしさは、（ついに）ここまでに至ったのだなあ。私は三百鉢の梅を購入したところ、すべて病気の〔＝不自然な姿に歪められた〕梅で、その中に一つとして健全な姿のものはなかった。それを悲しむこと三日にして、そうしてこの（病的な）梅を療治しようと誓った。梅の鉢を壊し、すべて（の梅）を地面に植え直し、その（形を歪めている）縛（いましめ）を解いて、（今後）五年を区切りとして必ずこの梅を（もとの状態に）戻しこれを健全（な姿）にしようとした。私は本来文人や画家（の類）ではないので、甘んじて（風趣を解さない無粋者という）非難を受け、「病梅の館」というのを開いてそこに（病んだ）梅を集める。ああ。どうして私に用事のない日を多く、さらに空いた土地を多くさせ〔＝私が時間と土地を手に入れて〕、そこに広く天下（すべて）の病んだ梅を集め、私の生涯の月日を尽くして、それで梅を療治することができるだろうか（、いや、できるはずもない）。

解答

(一) 梅は曲がった姿を美として珍重し、真っ直ぐだと趣に欠ける

(二) 風流人の趣味的嗜好が一般に知れ渡り、不自然に曲がった梅を高値で取引する風潮が広まったから。

(三) 私は三百鉢の梅を買ったが、すべて不自然な姿で、中に一つとして自然な梅はなかった

(四) 取柄のない普通の姿を善しとし、曲がり傾いた梅の風趣を理解しないという非難。
せっかく美的な姿に整えた梅を、元に戻そうとするのは無粋だという非難。（別解例）

(五) 自分にできる範囲で梅の木を本来の姿に戻す目的。

解説

(一) 設問の要求が「現代語訳」なので、まずは直訳から始める。傍線部には「以A為B」の形があり、「AをBだと思う」などの意味

で教えられることが多いが、「以」は続く語が目的語であることを示す字であることもしっかり認識しておきたい。この場合は「曲」が目的語であり、日本語の上では名詞（句）と判断する。傍線部直後の部分は傍線部と対句になっており、「以曲」に対応するのが「以欹」の部分。もちろん梅の木が傾いていることを意味するので、「以曲」は枝や幹などが曲がっていることだと考えられる。これが「為美（美と思う）」の目的語句なのだから、「（枝や幹が）曲がっていること」「曲がった姿」と訳せる。「直則無姿」の部分の「則」は前後が「前提→帰結」の関係になることを示す接続の語で、本文にもあるように一般的には直前を条件接続の形で訓読する。要するに「直」という前提の下では「無姿」ということ。「直」は言うまでもなく「曲」に対する「直」で、「（枝や幹が）真っ直ぐ」である。「無姿」は対句になっている傍線部直後の部分を参考にすれば、「無姿」―「無景」で、「姿」「景」にそれぞれ「風姿」「風景」などの熟語がある点からも、「風趣に欠ける」「趣がない」という意味と判断できる。これで「梅（の木）は曲がった姿を美と思い、真っ直ぐだと趣がない」などの直訳ができあがる。ただ、この直訳の表現では日本語として言っていることが不分明である。具体的には「美と思い」の部分が問題であろう。この部分をわかりやすく言い換えればよい。本文のこの後の内容を読めば簡単に思いつくと思うが、盆栽などでは意図的に木の幹や枝をねじ曲げて、その曲がり具合の力感や趣を楽しむ。「美と思う」を「美的なものとして楽しむ」「美しいと評価する」などと言い換えるのは難しくないだろう。あとは解答欄のスペースに応じて簡潔にまとめればよい。

㈡　傍線部「文人画士孤癖之隠」が、少し前の「文人画士、心知其意～縄天下之梅也」と内容的に対応することに気づくかどうかがポイント。「孤」はもちろん他と切り離された状態、「隠」も当然表面に現れない状態、「癖」には「趣味」「嗜好」などの意味がある。したがって、「文人画士、心知其意～縄天下之梅也」でいう、「心の中でそう思っていても、まだおおっぴらにその趣味を宣伝していない」と内容的に対応するのである。そうすると、傍線部「文人画士孤癖之隠」の直前の一文「又不可以～以求銭也」と、「文人画士孤癖之隠」の直後「明告鬻梅～以求重価」が、「以前―現在」の関係で対応することもわかる。以上を踏まえれば、設問の要求「天下之梅皆病」の理由は、「文人画士孤癖之隠」が「曲がった梅が高値で売られる状態を出現させた」からであると判断できるだろう。これに本文にある「有……明告鬻梅者（梅を商う商人が曲がった梅を高値で売れることを知った）」という、高値を呼ぶようになった経緯を加え、解答欄のスペースを考慮して答えをまとめる。

㈢　これも㈠と同様、難しい字は一つもないが、だからこそ丁寧に訳す必要がある。「三百盆」の「盆」は、言うまでもなく盆栽の「盆」

で、つまり鉢のこと。「病」は、この文章ではいわゆる「病気（虫や毒素の類で弱っていること）」ではなく、意図的に本来の姿をねじ曲げられて弱っていることなので、それも注意したい。「無一完者」の部分は、「無（述語）」―「一完者（目的語）」という構文に注意。「完」はこの場合「病」と対義で用いられているので、「自然」「まとも」などの意味となり、「一完者」は「一つの自然な梅」で、これが「無」の目的語となっている。したがって、「まともな梅は一つもなかった」という表現より、構文を重視して「一つとしてまともな（自然な姿の）梅はなかった」としたほうが試験の「現代語訳」としては妥当。

㈣ 「詬厲」は〔注〕にあるように、「非難」。その内容の説明を求められているので、本文から筆者が受けるであろう「非難」を考えることになる。傍線部の前半「予本非文人画士」が条件接続で「甘受詬厲」につながっていることに注意。設問㈠の解説の「則」の所でも触れたが、条件接続は前後を「前提→帰結」という論理でつなぐ。この場合も「自分が文人画士でない」という前提で「詬厲（非難）を甘受する」という論理となる（少なくとも出題者は原文をそのように理解している）。本文における「文人画士」は、曲がった梅の風趣を好む者という位置づけで、筆者は彼らの行為について「文人画士之禍之烈至此」などと評し、傍線部の直前では風趣のために曲げられた梅に涙し、それを元の姿に戻そうと決意している。以上の点から、筆者の受けるであろう非難は、「風趣を解さない」「せっかく美しい姿になっている梅を元の何の取柄もない姿に戻そうとする」などであることは容易に判断できよう。それを簡潔にまとめればよい。

㈤ 必ず答えに書かなければならないポイントが、「病の梅を回復させる」「梅を元の姿に戻す」であることは解説の必要はないと思われる。問題は傍線部を含む一文の直後、本文の末尾の部分で、「安得使予～療梅也哉」と反語表現で「時間と土地をたっぷり使って、天下すべての梅の病を、自分の生涯のすべてを尽くして療治できるだろうか、いや、できない」と言っていることに気づくかどうか。不自然な姿にされた梅をすべて救うことはできない、と言っているのだから、「病梅之館」の目的の説明に「自分にできる範囲で」「（全部は無理だが）少しでも」などという限定を付け加えるべきである。